

繪 卷

永井路子

絵
卷

永井路子

読売新聞社刊

繪^え
卷^{まき}

昭和四十一年十二月一日 第一刷

定価 四五〇円

著者 永^{なが}井^い路^{みち}子^こ

発行者 鈴木敏夫

印刷所 大日本印刷株式会社

発行所 読売新聞社

東京都中央区銀座西三の一

大阪市北区野崎町七七

北九州市小倉区中津口七三

目次

すがめ殿……………五

静賢法印日記(その一)……………四一

寵姫……………六七

静賢法印日記(その二)……………一〇二

打とうよ鼓……………一二五

静賢法印日記(その三)……………一六三

謀臣……………一八五

静賢法印日記(その四)……………二三〇

乳母どの……………二三八

静賢法印日記(その五)……………二七五

繪

卷

日本独特の絵巻の美しさは、ひとつひとつの絵のみごとさもさることながら、間にはさまれた詞書ことばがきとのふしぎな諧調かいちょうにもあるような気がします。いま、字で書いた絵巻を思いたったのは、いわゆる源平時代という、豪奢ごうしゃにして陰鬱いんうつ、優雅にして醜惡な時代をえがくには、これがいちばんふさわしいと思つたからにほかなりません。静賢けんげん法印日記は、いわばその詞書の部分にあたります。

すがめ殿どの

一

笑い声に特徴があつた。

ふひや、ふわ、ふわ、ふわ……

とらえどころのない声を出す。ひどいやぶにらみであることが、さらにその印象を深くしている。

——あいつは眇すがめのおかげで得をしている。

みなものためよし
ためいき
源為義が溜息まじりにそう言つたという。同じ武門の生れで、しかも同い年でありながら、

彼平忠盛に一步々引離されてゆく為義にしてみれば、そうでも思わなければやりきれなかったのかもしれない。

焦点の合わない瞳はいつもずっとぼけていて、彼の出入りする先々での評判は、
「憎めないやつだ」

の一語につきていた。

嘘をつけ。見ろよ、片方の目を。どうしてどうして、油断も隙もなるものか。

為義が漠然とながらそれに気づいたのは、かなり以前のことだ。そのころ為義はまだ十九。検非違使尉（三等官）になって間もなくであった。あるとき、彼の郎等の一人、時丸が、公家の下人とつまらないことから喧嘩して、相手にかなりの傷を負わせて逃げて来た。

「お助け下さい、殿」

手をあわせられて、

「よし、よし、俺がついている。心配するな」

為義が大手をひろげてかばう気になったのは、日頃から威勢のよいこの若者を愛していたからだけではない。

そのとき、彼は若いながら、源氏武士団の総帥だった。しかも、彼の祖父で一世に武名をとどろかせた八幡太郎義家が十年ほど前に死んで以来、その子供の間で同志打ちがあったりして、一族は昔日の威力を失っていた。為義は若くして一応検非違使尉になったものの、頼りになる

後見役もいず、都では全く孤立した状態だったのである。

これに比べて、忠盛たち平家一門は上り坂にあった。義家の子の義親が西国で乱暴を働いたとき、官命をうけてこれを討伐したのが、忠盛の父正盛で、これを機に平家一門はときの白河法皇はじめ公家の信頼を得てみるみる勢力を伸ばし、忠盛も都に横行していた盗賊夏焼太夫をとらえた功績で、十八歳で従五位下に叙せられた。

そのころまだ六位でうろうろしていた為義にしてみれば腹の中が煮えたぎるほど口惜しくてたまらない。当時の六位と五位というのは一階級の差ではなく、いわば雇員と正社員ぐらいのひらきがあったからだ。

上り坂の平氏と落ち目の源氏。

なに負けるものかという若者らしい客気と、郎等ひとりぐらいかばえなくては源氏の名折れだというような焦りが、意地にも為義に大手をひろげさせたのである。

時丸が為義の所へ逃げこんだことは、すぐ人々に知れ渡った。

「そなた、時丸をかくしているそうだが……」

検非違使別当（長官）の藤原宗忠は苦りきって為義を呼びつけた。

「困るな、そういうことは。だいたい検非違使庁というのは、そうした犯人をつかまえる役所じゃないか。その役人であるそなたが、私情に溺れて……」

「仰せですが……、時丸は私の所にはおりません……」

為義はい、を切った。

「それに第一、あの傷害事件の犯人が時丸であるかどうかこれから調べませんと……」

「わからないというのか。が、相手は時丸にやられたと申したてている」

「それではよく取調べまして……」

すこしでも時を稼ぐつもりだった。

が、別当宗忠は、その後もしつこく為義を問いつめて来た。

「どうした。犯人はわかったか」

「目下調べております」

「ほかに犯人があるとでもいうのかね」

「は……」

「よし、わしが直接調べて見よう」

こんな小さな事件に別当が乗り出すのは異例である。どうやら為義の態度に、別当も意地になったらしい。ついに犯人は時丸だと認めざるを得ない立場に追いこまれたが、それでも彼はまだ抵抗した。時丸のありがわからないと申したてて引きのばしを策したのである。

「時丸のありがわかったか」

「まだでございます」

「そちがかくしているという評判だぞ」

「いや、そのようなことは……」

為義が忠盛に出逢ったのは、ちょうどそのころである。夕闇こめる朱雀大路を供もつれずに黒鹿毛に乗って来た忠盛は、使の庁からもどる為義をみつけると、手をあげて馬を近づけて来た。色白で大柄な彼の白っぽい鎧直垂は、薄闇の中で、ぼわぼわとふやけてみえる。例の眇にとらえどころのない笑みをうかべて、

「やあ、久しぶりだな」

大きな声をかけ、その眇を近づけると、だしぬけに、声を低めもせずに言つてのけた。

「時丸は元気か？」

「うっ……」

為義は声を吞んであたりを見廻した。見廻してしまつてから、これではみすみす白状したようなものだと思つて、慌てて大きな声になつた。

「知らぬぞ、時丸のありかなど……俺は知らぬ」

忠盛は為義をみつめている。いや、みつめているのだらうが、片方の瞳は例によってあらぬ方向へ向いているので、為義はなんだか、からかわれているような気がしてしまふ。為義はいきり立つて怒鳴つた。

「知らんといつたら知らん！」

「おや、そうかい」

忠盛はけろりとして言った。

「俺はまた、てつきりお前がかくしてるのかと思ったよ」

「何を！」

詰めよる前に、するりと忠盛は身をひいて、黒鹿毛にだくを打たせていた。

ふひゃ、ふわ、ふわ、ふわ……

捉えどころのない笑い声だけが後に残った。嫌な奴だと舌打ちする暇もない一瞬のことであつた。

それから間もなく――。

為義は、九州の海賊退治に行った忠盛の父の正盛が、凱旋がいせんして来ても頭目の幾人かを自分の手許に止めておいて使の序に差出さない、という噂うわさを聞きこんだ。なんでも正盛は小者だけを差出し、大物は身代金みしろと引換えに逃がしてやる魂胆だといふのである。

これだ！

為義はこの事件にとびつき、早速別当に密告した。

「実にけしからん奴です。官をないがしろにした振舞ふるまいではありませぬか」

「ふうむ。それは重大だ」

別当も眉を寄せて腕を組んだ。

「仰せをうければ、私、直ちに踏込んでとらえて参ります」

為義は早速出動の準備をととのえた。

が、それから数日たっても、とうとう別当からの出動命令は出なかった。

「あの件はどうなりました？」

為義が催促すると、別当はなぜか答を渋った。

「うむ、あれか。いま内密に調べているのでな」

「私も調べましたが間違いはないようです。御下知^{げち}を頂けませんか」

「ふむ……」

別当は顔をしかめ、それから急に思いついたように言った。

「お、それより、そなたの方はどうした？ 時丸のありかはわからぬか。今まで放っておくとは怠慢^{たいまん}だぞ」

為義は唇^{くちびる}をかんだ。それとこれとは事件の質が違う。時丸はたかが傷害犯だし、あつち^{あつち}は西国をあらしまわった凶悪な海賊どもだ。しかも俺は、恩義によつて時丸をかばっているのに、平家方は私利に眼がくらんで公法を枉^{かた}げようとしている……

地団駄^{じだんだ}を踏んだが、しょせん三等官は長官に頭があげられない。すったもんだの末、とうとうかばいきれなくなつて、為義は時丸を差出さねばなくなつてしまった。しかも海賊の件はそれきり沙汰やみなのである。

「ようし、正盛、忠盛め。ただではおかぬ」

氣負いたった矢先、為義は、またも朱雀大路で忠盛に行逢った。

「おい、暫くだな」

近づいて行つたのは為義の方からだつた。忠盛に例の笑いを浮べる暇もあたえず、

「そのうち海賊を貰いに行くからな」

為義はかみつくように言つた。

「なんのことだ、そりゃあ」

「聞くまでもあるまい、お前がかくしている海賊のことだ」

「海賊？ そんな物騒なものを家に置いておくものか」

「しらを切るな」

「いや、ほんとだ、ほんとだよ」

眇の頬に微笑が上つた。見ようによつては、ひどく人のよげに見える間のぬけた笑いである。為義は知つていた。そのあとに例のふひゃ、ふわ、ふわ、の続くのを……

予想通りの笑声をひびかせながら、忠盛は、ほんとだ、を繰返している。

「ほんとだ、なんなら、これから探しに来てくれてもいい」

すつとぼけた瞳にみつめられて、瞬間、為義が、おや、そうかな、という氣になったのも事実である。

そしてさすがに長官の許しもうけずに忠盛の宅に踏込むことをはばかり、その日はそれで

別れてしまった。

あとでわかったことだが、たしかにそのとき海賊は忠盛たちのところにはいなかった。が、それは正確に言えば、いないのではない。それと覺つた忠盛たちが、要領よく彼等を逃がしてしまつたのである。

「——謀られたか……」

ちよつとの間でも忠盛の言葉を信じかけた自分に為義は腹をたてた。あの間のぬけたふひや、ふわ、ふわ……は俺をからかう笑いであつたのか……

そのうえ長官に楯ついたおかげで、為義はその後いくら拔群の功績をたてても、ついに昇進の機会はやつて来なかつた。それに比べて、海賊たちに恩を売つた平家一門は、以後彼等を手に使つて、密貿易にまで乗り出した様子である。

——なんたる不公平！

いきりたつた為義だったが、さらに事の真相を知るに及んで、彼は不満をぶちまける口さえ閉じざるを得なくなつてしまつた。平家一門の前にのびかけた検非違使庁の手をさえぎつたのは意外な人物だつたからである。

二

意外な人物——。それは本来、平家一門に海賊討伐を命じたひとだ。第七十二代の皇位を継

いで十五年、皇子に讓位ののちも政治を裁決して院政の形態を始めた白河法皇そのひとだったのである。

海賊討伐を命じたひとが、逆に見逃しに一役買う？

始めは為義にはそれが信じられなかったようだが、どうやらそれは、まぎれもない事実であつたらしい。為義から密告をうけ、事の重大性に驚いて内偵を始めた検非違使別当宗忠は、正盛父子の犯人隠匿いんたくの事実をつきとめると、こっそりこれを白河法皇に上申じやうしんした。

「ふむ、まことか、それは……」

白河法皇も信じられない顔付をした。

「事実とすれば容易ならぬ問題だ。よし、事を荒だてる前に、直々じきに正盛に尋ねてみよう」
そして翌日、白河は別当を召して言った。

「早速正盛に聞いて見たがな、そんな事実はないという事であつた」

「は、然し……」

言いかけて別当は口をつぐんだ。法皇の言葉に逆らうことは許されないからだ。が、為義にせつつかれるので、別当は暫くしてから、もう一度恐る恐る白河に上申した。

「いかがでございましょう、念の為、正盛の所を調べてみましたは……」

「ふん……」

白河の態度は極めて冷たかった。